

## 絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『ころべばいいのに』で表現遊びを楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

石井・下川瑞稀・田中杏奈  
居石智衣・徳永T・水谷璃晴  
上原樹里・塩塚美喜

**題材とした絵本：**『ころべばいいのに』

文：ヨシタケシンスケ

絵：ヨシタケシンスケ

出版社：ブロンズ新社

初出版：2019.06.25

**タイトル：**「いやなことがあったら」

**配役：**ナレーション（石井）、女の子（下川瑞稀）、怪獣・ペープサート（居石智衣・上原樹里）ピアノ（田中杏奈）、バルーン（水谷璃晴・塩塚美喜）

**担当：**プロデューサー（上原樹里）、ディレクター（下川瑞稀）アシスタントディレクター（徳永T）、絵コンテ（水谷璃晴）、音楽（田中杏奈）、カメラ・マイク（徳永T）、美術・小道具（全員）、会計（居石智衣）、報告書（石井）

### 1. 題材「ころべばいいのに」選定の理由

この本を基にして劇をする事で、子どもの気持ちや感情の変化を通して考える機会になると思ったからだ。

イライラや怒った時大人は、自分で落ち着かせようとする事ができる。しかし、子どもはそうはいかない。すぐにその場で、その気持ちを泣いて表すだろう。5歳児にとって感情の表し方とは、言葉や行動だと思う。だからこそ、この題材を使うことで、子どもの感情を言葉にしたり、友達や親とのコミュニケーションの関わりが増えたりできると思う。できるだけ子どもと対話をする事で、その意見を活かす題材であると考え。

（上原樹里）

### 2. 「絵本の世界を楽しむ」

この題材において、私たちは嫌な気持ちになったときに、遊びの活動を通して楽しい気持ちになるようにと考え、新聞遊びと見たて遊び（ごっこ遊び）をした。

#### ・新聞紙遊び

新聞紙遊びとは、不要になった新聞紙を自由にやぶいたり丸めたりしながら、感触や形の変化を楽しむことができる遊びです。新聞紙遊びを通して、全身を動かす粗大運動や、手先を細かく使った微細運動をさかんに行うというねらいがあります。

そのねらいを通して私たちは、紙鉄砲をつくって思い切り振りかぶって体を動かしたり、大きい音が出るように友達や保育者と話したりしながら、子ども達と一緒に楽しむことが出来た。子ども達もありがとと言っていっぱい音を鳴らして楽しむ様子が見られた。こども劇場が終わっても、子ども達が身近なものをつかって遊ぶことが出来るように考えた。

・見立て遊び（ごっこ遊び）

見立て遊びとは、身近にあるものを別のものに見立て、イメージを膨らませながら行う遊びです。

私たちは、ダンボールを重ねた物をお家に見立て、怪獣になりきり、破壊して遊んだ。本番に向けて画面を見ながらどうやって怪獣になりきるのかを一緒に考えながら遊ぶことができた。

(居石智衣)

### 3.対話的表現活動で大切にしたこと

話している言葉と抑揚によって子どもたちに世界観を押し付けているような感じになるのを防ぎたいと考えたことと、自分が話す言葉で子どもたち一人一人の中で世界観をつくりあげて欲しいと考えた。実際に2つの園に向けて行なってみて、どちらの園も楽しそうに参加してくれたように感じた。自分なりの解釈で紙鉄砲であそんでくれたり、怪獣ごっこをしてくれたり、物語の最中はじっと座って聞いてくれたり子どもたち一人ひとりが自分自身で楽しめていたように感じた。

(石井)

### 4.内容について

#### (1) 全体の構成

『いやなことがあったら』

あらすじ

あるところに女の子が一人。どうやら嫌なことがたくさんあったらしく、心の中が嫌な気持ちでいっぱい。そんな気持ちをスッキリするべく女の子が皆と一緒に様々な方法を試していくお話。

構成について

この劇のもとになった「ころべばいいのに」では、嫌な気持ちについて様々な考察がヨシタケシンスケ氏によってなされているが、その内容を全て盛り込もうとするととても子ども劇場の時間内に納まらないため、今回は内容を整理して時間内に納まるようにしている。他にも、劇の途中に子ども達との対話の要素を含めるため、子ども達に質問をして、その答えにこちらが即興で応えるという場面も追加している。そのためか、最初のリハーサルなどでは劇を進めるのが早くなってしまい、予定より早く終わってしまうこともあった。

他にも話し合った事として怪獣ごっこ紙鉄砲遊びの順番があった。劇の後半、怪獣に扮した学生が段ボールなどで作った家や車を並べた町を暴れまわるシーンがあり、最初は怪獣のシーンのみだったが、子ども達との掛け合いのある部分を劇の中に入れた方がより良い劇にあると教員からのアドバイスがあったため、紙鉄砲を園に送り子ども達と一緒に紙鉄砲で遊ぶシーンを入れることになった。そして怪獣のシーンのあとにその紙鉄砲のシーンをいれていたが、シーンの切り替えが難しく感じたのとせっかく紙鉄砲で遊ぶのなら怪獣が暴れて

いるシーンで子どもたちが一緒に紙鉄砲を鳴らせば、子ども達がシーンにより入り込むことができるのではないかという意見により、紙鉄砲で遊ぶシーンの方を先にすることになった。結果として紙鉄砲は子ども達にとっても好評で、怪獣のシーンにおいても怪獣の動きに合わせて一緒に鳴らしてくれていたりした。

(徳永T)

## (2) 子どもたちとの対話について

子どもたちとの対話として、次の3つの場面について設定した。

始めにオープニングで子どもたちとの対話をし、画面に興味を向けた。

活動の中では、嫌な気持ちになったときにどうするかを問いかけ、子どもに答えてもらった。その際に、耳に手をあてて画面に近づいたり、一人一人手を挙げるよう声掛けをすることで、子どもたちが反応しやすくしたり、子どもの反応を聞き取りやすく、こちらも反応ができるようにした。子どもたちの反応に対して、繰り返し声に出し、実際にやってみせた。また、劇の終盤に紙鉄砲をした際にも声かけをし、紙鉄砲がどうだったか子どもたちに反応してもらい、こちらからも上手に紙鉄砲で遊んでいたことを伝えたりして対話をした。

最後のエンディングでは劇の感想を子どもに聞き、子どもたちが反応してくれるような対話をした。

(下川瑞稀)

## (3) 演出の工夫 (道具や見せ方)

子ども達に嫌な気持ちから嬉しい気持ちに変化していく様子を伝える為に、暗い色の風船(青・紫)や明るい色(黄色・ピンク)の風船を使って気持ちの変化を色で表して表現した。それに風船に嫌な時の顔や嬉しい時の顔を書いたりして気持ちの変化を表した。風船だけで気持ちを表すのではなく、ペープサートで嫌なことがあったらどうするかを表したり、子ども達が嫌な時どうするかを対話で話したことをこちらが身体や物を使って表現したりした。(写真1)

怪獣ごっこでは子ども達が知っている車やお家、風船などを使って、家や車を蹴ったり投げたり、風船を割ったりして怪獣ごっこをした。

紙鉄砲では、子ども達に嫌な気持ちは遊びから発散することが出来るということを伝えたかったので子ども達も一緒に遊べるように園に紙鉄砲を送り、一緒に対話をしながら紙鉄砲を使って遊んだ。

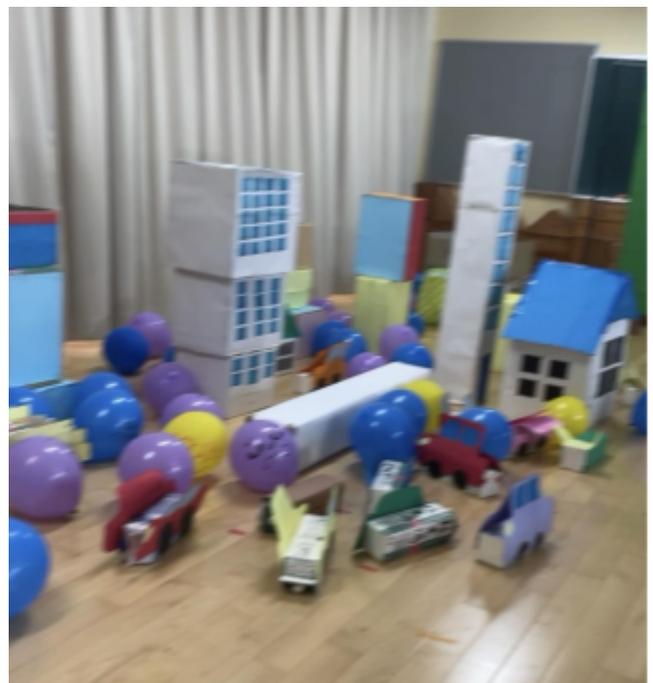


写真1 作成したおもちゃ・気持ちを表す風船等の様子



写真2 撮影の様子



写真3 撮影の様子

(塩塚美喜)

#### (4) 音と音楽

嫌な感情や、楽しい感情をピアノで表現した。嫌なこと一つ一つ音を変えたり、楽しい感情をリズムが弾むように弾いて工夫した。

恐竜が出てくる所は、低い音で足を踏みならして恐竜の足跡を表現し、黄色の風船やピンクの風船が出てきたときに明るい音で弾くと場も明るい雰囲気になるのが分かりやすく表現できる。途中のお昼寝の時に自分でアレンジした音を使って、間奏などを工夫したりした。エンディングで弾いた「とけいのうた」では、話す人の声とピアノの音が綺麗にマッチして聞こえるように音の大きさを考えながら演奏した。物語を通して音楽を自分で作成したり、劇の中でいろんな音を使って表現したり出来て、自分の中でとてもいい経験になった。

(田中杏奈)

#### (5) プレ・パフォーマンスにおける子どもの姿と省察

最初に置かれている、嫌な気持ちを表す青い風船がだんだん黄色の風船に変わっていくのに子どもたちは気づいていた。黄色の風船を飛ばすと「黄色い風船がきた！」などの反応が伺えた。

省察としてはオープニングのあといきなり始まるように見えるためオープニングトーク担当の3人に子ども達と対話してもらい、最後に「それでは、スタート！」と言って始まるようにした。嫌なことがあったらどうするか子どもたちに答えてもらう時、一斉に言われると聞き取れないかもしれないので「手を挙げて教えてくれる？」と言って挙手制にした。自分たちは子どもたちの名前がわからなくて当てられないので現場にいる先生達に手紙を書いて当ててもらえるようにした。

プレパフォーマンスにおいて子ども達は「～してみよう！」と声をかけると一緒に紙鉄砲など体を動かして楽しんでくれた。それ以外でも自分たちが気づいたことを先生や友達、私たちに大きな声で教えてくれたりする場面も多くあった。

(水谷璃晴)

#### (6) 取り組む過程での改善と工夫

取り組む過程で、説明が少なく子ども達に伝わりにくいことがあった。なので、ひとつひとつ説明をしたり、言葉を入れたりしながらどんな状況なのか伝わるように改善した。

又、子ども達との対話を大切にするために、良く聞いて返答するところを意識した。

おもちゃを貸してくれないなどの嫌な気持ちと、みんなで遊んだ嬉しい気持ちとの気持ちの違いがわかるように、暗い色の風船と明るい色の風船を使い、色をはっきり見せれるように、色の違いを分かりやすくつけたり、風船に顔を書いたりしながら、沢山の風船を準備した。

(居石智衣)

### (7) 子どもたちの様子と表現

子どもたちの様子は紙鉄砲を人数分用意して送ったことで、自分たち含め全員で楽しむことができた。最初子どもたちに紙鉄砲の使い方を説明するのが難しかったので持ち手などにシールを貼り、「赤いシールのところを持ってね」など子供たちにわかりやすいようにした。それもあって子どもたちはみんなスムーズに紙鉄砲を使っていた。他にも嫌なことがあったらどうするか聞いた時、たくさん子どもたちが手を挙げて発表してくれたし、風船の色が暗い色から明るい色に変化していったのも気付いてくれていた。

(水谷璃晴)

## 5.取り組みを通して得たこと

### 【下川瑞稀】

今回の幼教こども劇場を通じて、わたしたちが考えていたことが、実際に子どもの前では全てうまくいくわけではないということを学んだ。

劇の中で、暗い色の風船と明るい色の風船を使い、女の子の感情を表していた。子どもたちは風船を見て理解してくれると思っていたが、実際にプレ・リハーサルでやってみると、風船には気づいていたが、風船が感情を表していることに気づいていないようだった。そのため、本番では風船が女の子の気持ちを表していることをナレーションで説明をした。また、怪獣ごっこをする場面では、子どもたちも一緒に怪獣になって見立て遊びをしようと思っていたが、実際子どもたちの前でやってみると、怪獣が建物を倒したり車を投げたりしているところを集中して見ていた。そのため、本番では紙鉄砲で遊ぶ場面と怪獣ごっこの場面を入れ替え、座って見れる環境を作った。さらに、子どもたちとの対話をする際、子どもに反応してもらったあとにもう一度こちらから繰り返し言うことによって、対話をしやすくなった。

今回の作品を作るにあたって、子どもたちの反応を見て最初に作っておいた流れを変えたり、子どもが考えて理解し、楽しみながら劇を見れるようにたくさん工夫をした。グループで試行錯誤を繰り返し、子どもたちが楽しめるような作品を作ることができた。

### 【塩塚美喜】

今回の幼教こども劇場を通じて、自分たちが楽しくないと子ども達も楽しめないことや1つの絵本から子ども達の目線で考えて劇をするということの難しさを痛感することができた。

三回の劇を通してどんなに策をねっていても一回一回の劇での子ども達の反応は違い、訂正する部分が多かったように感じた。子ども達が楽しめるように劇が終わった後に話し合いを繰り返し試行錯誤して子ども達が楽しめる劇をグループのみんなで作っていった。

気持ちの変化を表す為の風船では、風船の数は初めの方は少なかったが風船を多くすることでだんだん風船が明るい色に変化していることが子どもに伝わっていたり風船に困った時の顔や嬉しい時の顔を書いてあることに気づいていた子どももいた。

怪獣ごっこでは子ども達は紙鉄砲をして私たちは恐竜ごっこをするという流れだったが子どもは画面越しにわたしたちがしている恐竜ごっこを夢中でみている子どもがいたので落ち着いて皆が見られるように紙鉄砲と怪獣ごっこの順番を変えたりアドリブで子ども達に問いかけたりして対話の部分を増やし子どもとコミュニケーションを取る部分を増やしたしていた。

今回の劇を通して一回一回の劇はとても貴重で子ども達の反応から改善点も多く見られるし保育実習とは違った反応を見られてとても勉強になる部分が多かった。実習では一日子ども達と一緒にいても劇をしているときのような反応は見られないけど劇では子ども達のきらきらした目や反応、子ども達の考えなど子ども目線で多くのことを学ぶことができたのでとても勉強になった。

#### 【水谷璃晴】

今回の幼教こども劇場を通して、実際に子どもたちと対面せずにコミュニケーションをとる難しさと県外など遠い場所にいる子どもたちでもリモートを使って一緒に楽しむことが出来ることを知った。特に1回目の滋賀県にある小谷保育園での導入では子どもたちとの掛け合いの中で日本地図を描いて自分たちと小谷保育園がどれくらい離れているか分かりやすくなり、滋賀の天気と福岡の天気を比べてみたりと県外に住んでいるからこそ出来る会話を考えられた。そして「みんなが住んでいる場所の近くには何がある？」という質問をして、自分たちの予想では琵琶湖とか、子どもたちが住んでいるところの近くにあるお店や公園の名前が出てくると思っていた。しかし実際には「三重県がある！」など、自分たちが思っているよりもしっかりした答えが返ってきて面白いなと思った。思い通りにいかないことがあったけど、そこで焦って余裕が無いところを子どもたちにみせずみんな冷静に対応していたことがとても良かったと思うし、自分たちも楽しむことが出来た。

#### 【居石智衣】

今回子ども幼教こども劇場で感じたことは、リモートで伝えるのがとても難しいと感じた。今回感染症防止のためリモート発表になった。リモートでの発表では子どもたちも一緒に遊ぶとなると難しいところが沢山あり、画面越しの子どもにどう言葉を投げかけるかやどのような流れだったら伝わるか工夫しながら決めて行った。また、反対にリモートなので、子ども達の反応をしっかり観察できたり、事前にプレゼントを用意しておくことで子どもたちも楽しく一緒に遊びながら観ることができた。そう言ったことから保育士になったらどのような環境でも、どうしたら子どもたちの学びに繋がるのか考えなければいけないと感じた。

最後に初めはグダグダで初めてのこともあり難しい部分もあったが、みんなで話し合いをし意見を出し合いながら練習を重ねることで、よりよくなるのを感じました。みんなで協力してやることの大切さをみにしみて感じる事が出来たので良い体験が出来た。

#### 【徳永智也】

幼教こども劇場を通して私が得たものはとても多くあります。自分一人ではなく自分以外の誰かと複数でしっかりと話し合いながら作品を作っていくこと、大勢の人にその作品を見てもらうこと、作品をより良くしようと努力したり工夫したりすること、自分の作品についての意見をたくさんの人からもらうこと、オンラインで遠くの人たちと繋がって話すこと、その他にもまだまだ多くの経験をしました。その中でも一番いい経験だと思っているのは、自分でない誰かと複数で協力して作品を作り上げた経験です。

最初、子ども劇場の話を聞いたときには、面倒だなとしか思っていませんでしたが、グループの皆と話し合いを重ね、劇の内容が出来上がっていく度になんとも言えない嬉しさを感じました。白紙だった脚本が埋まり、ただの段ボールが家や車になり、劇の流れができていく様子を見ると、だんだんとやる気がわいてきて、本番が終わったときには心地よい達成感を感じました。

#### 【田中杏奈】

今回、幼教こども劇場を通して感じた事は、リモートで子どもたちを楽しませることが出来るのかとても不安の中、実際オンラインを通して子供たちを前に劇を行いました。対面で出来なくて伝えたい情報が上手く伝えられなかったり、電波が途切れて声が届かなかったり苦戦した部分も多くありましたが、グループで子ども達にどのように伝わるか沢山考えました。劇の中で紙鉄砲を使う場面があり、事前に子供たちにプレゼントを用意して、本番一緒に遊ぶなど子ども達もとても喜んでいました。一回目より2回目、3回目とスムーズに進んでいて、子ども達に沢山質問をしたり、リアクションをわざと大袈裟にとると、子ども達も自然と笑顔になってたような気がしました。最後の発表が終わって達成感しなくて、グループの皆さんと学校生活の大きな思い出を作れました。対面ではなくオンラインだったけれど、オンラインだからこそ自分達の学びに大きく繋がったとおもいます。子供達からのメッセージを見て頑張ってた良かったなと改めて実感しました。

#### 【石井】

今回の幼教こども劇場を通じて、題材の選定からみんなで考えながら準備してきました。子どもたちの事を一番に考え、リハーサルをさせて頂いた子どもたちの反応をみてもう一度考え直したり、直前まで考えて練り直してを繰り返して準備を行ないましたが、思い通りにいかないなど率直に思いました。ナレーションをする中でもたくさん意識した部分もありましたが、それ以前にアドリブが本当に苦手で、オンライン上ということもあって沢山の事を考えすぎてアドリブで子どもたちへの声掛け等、難しい部分がたくさんありました。子どもたちはこんな反応をするのではないかと予想していたところが全く違う反応だったり戸惑うところもすごく多かったように思います。それでも紙鉄砲を使って遊ぶ姿は楽しそうだったり、劇が終わってからでも遊んでくれていたところを見て、頑張ってた良かったと思えました。

#### 【上原樹里】

今回の幼教こども劇場を通して、準備、練習の大切さを学んだ。対話場面では子どもたちが何と言うのかを考えながら話した。しかし、本番では考えられない意見を出してくれた。その時焦らずに対応したりできるかの練習をした。限られた時間で子どもと遊び対話することを楽しんだ。私たちの真似をして遊んだりする子どもの姿を見てすごく達成感があった。見えないところまで準備をしたりするのは大変だったがすごく楽しかった。本番を想像して設定を組み直した。みんなが理解し、みんなで考える事、1人に任せないできるだけみんなでするなど意図的にしていた。

こうしたら子どもに伝わるこういう言い方をしたらいいなど細かいところまで話し合い意見を出し合った。本番では、私たちが想像していた以上に盛り上がって嬉しかった。何度も話し合い効率よく準備をし発表の練習を繰り返した。子どもたちの反応を見て短い時間だったけど一緒に楽しむことができ良かったと思う。